



島根大学外国語教育センターの挑戦

西脇 宏

島根大学

Hiroshi Nishiwaki
Shimane University

Reference Data:

Nishiwaki, H. (2007). 島根大学外国語教育センターの挑戦 (Challenges of the Center for Foreign Language Education, Shimane University.) In K. Bradford-Watts (Ed.), JALT2006 Conference Proceedings. Tokyo: JALT.

When Japanese national universities were being incorporated, Shimane University established the Center for Foreign Language Education (CFLE), which is primarily concerned with foreign language education in liberal arts education. Since then, the CFLE has targeted a variety of educational challenges which were unable to be resolved during the previous era. This paper introduces some of the challenges, focusing especially on the most recent one: the framework for the essential minimum of foreign languages other than English.

島根大学は国立大学法人化の際に外国語教育センターを立ち上げた。センターの主な業務は一般教養科目の外国語教育であるが、法人化前には実現できなかった様々な教育上の挑戦を行っている。本稿では、その中でも、最新の取り組みである英語以外の外国語についてのエッセンシャル・ミニマム(最低限の必須項目)を紹介する。

島根大学の概要

大学設置基準の大綱化、国立大学の法人化等を経て、大学教育における初修外国語¹⁾の位置付けも、大学ごと、学部ごとにさまざまに異なるものとなった。島根大学外国語教育センター(以下CFLEとする)の挑戦について語る前に、その前提として、われわれの活動の場である島根大学の概要について、ごく簡単に紹介する。

本論との関係では、島根大学の沿革について、以下の3つの日付を確認しておけば、十分であろう。

1949年	5月	旧島根大学発足。第2次世界大戦後に順次設置されたいわゆる新制大学。
2003年	10月	旧島根医科大学(1975年10月設置)と統合し、新島根大学となる。
2004年	4月	国立大学法人法の施行により、国立大学法人島根大学となる。 CFLE設置。

島根大学では、他の多くの国立大学法人とは異なり、大学教育開発センター設置よりも前に、CFLEが法人化と同時に設置された。CFLEは、その発足時からして、法人化後の大学教育・運営のトップランナーたるべく定められていたのである。

現在、島根大学は、法文学部、教育学部、医学部、総合理工学部、生物資源科学部の5学部で構成されている。医学部は出雲キャンパスにあり、CFLEも一部授業担当はしているものの、現在のところ独自カリキュラムで外国語教育を行っている。松江キャンパスにある他の4学部の入学定員の合計は約1,000名であり、CFLEが教育対象としているのは、この1,000名の学生である。これらの学生の外国語教育はすべてCFLEの教員スタッフが実施しており、学部所属教員は教養外国語の授業を一切行っていない。

大学院博士課程は、島根大学では医学部と総合理工学部の一部学科にしか存在しない。学問分野を網羅し、そのすべてにおいて博士号を授与する高等教育機関というのが大学の世界基準であるなら、島根大学は、とてもUniversityとは揚言できない、特殊日本的な小規模大学の一つである。

島根大学における初修外国語教育

開設外国語と単位数

島根大学松江キャンパスの入学生は、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国・朝鮮語から一つを選択し、卒業要件として4単位を必ず履修しなければならない(4単位選択必修)。外国語の選択に関しては、入学時の学部オリエンテーションで学生の希望を調査し、クラス上限人数との兼ね合いで必要に応じて調整を行い、決定している。全員が第1希望で選択が確定するのが望ましいが、平成17、18年度は若干名の学生の第1希望が通らなかった。全員が選択を確定することができたのは、第2希望においてである。

また、島根大学における外国語の単位は、1単位30時間(15コマ)の授業を前提としている。したがって、すべての学生は、1年次の前・後期に、週4時間、総計120時間の授業を受けることになる(すでに述べたように、医学部は別カリキュラム)。

CFLEのカリキュラム改革

CFLE設置以前も必修単位数は同じであったが、文法(G)と読本(L)に分けた授業展開をしており、さらに、後期の授業の履修資格として前期単位の修得を前提としていたので、授業科目名は、〇〇語IGa、〇〇語IGb、〇〇語ILa、〇〇語ILb(〇〇にはドイツ、フランス、中国、韓国・朝鮮が、それぞれ入る。以下同じ)に4つに細分されていた。クラスには学部・学科による指定があり、学生が授業や教員を選ぶことは一切できなかった。

CFLEが設置された平成16年度以降、前期科目は週2回、計60時間2単位の〇〇語I総合基礎となり、後期科目は、週1回30時間1単位の授業を2科目、計2単位履修する〇〇語IIとなった。時間割編成の都合上、前期科目にはクラス指定を残さざるを得なかったが、後期科目はすべて、学生が自由に選択できるメニュー授業とした。参考までに平成18年度〇〇語IIメニューとクラス上限人数を挙げておく。

総合(45名)、総合～検対策(～には、独、仏、中、ハングルが入る)(45名)、

応用-文法 (45名)、応用-読解 (45名)、運用-会話 (30名)、運用-リスニング(40名)

CFLEの教育改革

ここでは、CFLEが取り組んできた主な教育改革を項目ごとに簡単に紹介する。

- ① クラス人数の平均化、少人数化
以前は韓国・朝鮮語で100名を超えるクラスもまれではなかったが、クラス上限人数を設定し、平成16年度は60名、平成17年度は50名、平成18年度は45名を上限とすることで、クラス規模を着実に適正化している。上記で紹介した運用系のメニューは、小人数クラスとは言いがたい上限人数ではあるが、それはあくまでクラスの上限人数であり、平成18年度後期のクラス平均人数は、運用-会話が約20名、運用-リスニングが約18名である。

- ② 開講時間帯の統一
すべての外国語の開講時間帯を統一した。前期授業では、学部、学科別で3つのグループを作り、グループ別に開講時間帯を初修外国語で統一したため、クラス総数を削減しつつ、同時にクラス規模の適正化も図れるという、きわめて効率的なクラス運営が可能となった。
- ③ 外部外国語能力試験を想定した統一的到達度目標の設定
各初修外国語能力検定試験4級を、運用能力の具体的到達目標として想定した。
- ④ 成績評価基準の統一
すべての授業の成績評価基準を統一した。具体的には、次の通りで、初修外国語共通項目としてシラバスに明記している。試験の成績(中間試験、期末試験の合計点を80点満点に換算したもの)に平常点(最大20点)を加算し、成績を評価する。合計点が80点以上の人を「優」、70点～79点の人を「良」、60点～69点の人を「可」とする。60点未満の人は不可となる。試験を受けなかった人、授業を1/3以上欠席した人は未修となる。
- ⑤ シラバス記述項目の統一
授業の目的、科目の達成目標、成績評価の方法、履修上の指導等、シラバスの主な記述項目について、その共通化を徹底した。
- ⑥ 統一教科書、統一試験の導入
〇〇語Ⅰは、各外国語とも同一教科書を用い、同一試験で成績評価を行っている。〇〇語Ⅱは、メニューごとに同一教材を用い、均質な授業を行っている。試験期間が限定されているため、メニューごとの統一試験は現在のところ実施不可能であるが、範囲、難易度等の共通した試験をクラスごとに実施し、必要であれば得点補正を行った上で、成績を評価している。
- ⑦ 組織的な学習支援
教員スタッフがローテーションを組んでCFLEワークステーションに常駐し、学生の質問、留学相談等に対応している。

中間試験で合格点に達しなかった学生のために、得点に応じた補習を組織的に実施し、中間段階で単位修得をあきらめる学生が出ないようにケアしている。

- ⑧ 組織的な自己点検、評価、改善
これらは常勤教員の重要な職務であり、現在行っている主な項目は次の通りである。
 1. 前期選択希望調査に関する点検
 2. 前期中間試験教員アンケート(試験結果の集計を含む)
 3. 前期学生アンケート(実施、集計、公表)
 4. 後期クラス・選択決定に関する点検
 5. 後期中間試験教員アンケート(試験結果の集計を含む)
 6. 後期学生アンケート(実施、集計、公表)

以上のようなCFLEが実施する教育改革の最大の特徴は何かと問われれば、それは、教育への組織的取り組みということであろう。上記からも明らかなように、われわれの改革は、個々の授業、個々の教員、個々の外国語の改革ではなく、初修外国語教育全体にかかわる改革なのである。

選択科目としての開講であれば、それが妥当であるかどうかはさておき、学生の自由な選択により、授業科目は自然淘汰されることになるのかもしれないが、島根大学で初修外国語は選択必修の枠組みの中での開講であり、CFLEの改革は、公平、平等性確保の観点からして、受益者たる学生にとってもきわめて有意義なものだと自負している。

次に、CFLEの組織的取り組みの最新情報として、エッセンシャル・ミニマムをめぐる取り組みを紹介したい。

島根大学初修外国語エッセンシャル・ミニマムの共通枠組み

検討経過

上記 CFLEの教育改革 ④ で述べたように、CFLEが設置された平成16年度以降、すべての初修外国語の授業は、同一の評価基準で成績の判定が行われている。成績評価の厳正化、透明化、公平化は、組織的教育の要とも言える重点的改革であり、その中でも、成績評価の公平化は、島根大学における初修外国語が選択必修科目であるだけに、最重要の課題である。選択した外国語によって単位修得に難易度の差があり、学生たちがそのことに不公平感を抱くことがあってはならないのである。

しかしながら、学生アンケートの自由記述では、外国語による難易度の差を指摘する意見が、相変わらず複数寄せられていた²⁾。そこでわれわれは、平成17年度の成績評価状況を点検することにした。次表が外国語別の結果である³⁾。

表.1 平成17年度の外国語別成績評価状況

外国語	優	良	可	不可	未修	合格	不合格	合計
ドイツ語	39.5%	28.8%	18.5%	5.5%	7.7%	86.8%	13.2%	100%
フランス語	43.1%	31.4%	12.2%	3.6%	9.7%	86.7%	13.3%	100%
中国語	58.5%	19.7%	11.8%	1.3%	8.7%	90.0%	10.0%	100%
韓国・朝鮮語	50.5%	21.1%	13.5%	2.1%	12.7%	85.2%	14.8%	100%
初修外国語	48.6%	24.1%	14.4%	3.1%	9.7%	87.2%	12.8%	100%

不可率は、ヨーロッパ言語に比べアジア言語が低く、一番高いドイツ語と一番低い中国語との差は、4.2%である。未修率を比較すると、最小値のドイツ語と最大値の韓国・朝鮮語との差は、ちょうど5%である。不可、未修を合算した不合格率で見ると、一番高いのは韓国・朝鮮語で、一番低い中国語との差は、4.8%である。

単位修得の難易度に関する上記3数値の外国語間格差は、いずれも5%以下であり、組織的取り組みの成果だと一定の評価ができる。しかし、合格者の成績内訳を見る限り、改善すべき余地もあることが分かる。優の割合は、ドイツ語と中国語では実に19%もの開きがあるのである。

原因の所在は明らかである。評価基準が共通でも、何をどこまで教えるかという肝心の教育内容に関しては、初修外国語全体での具体的検討およびコンセンサスの形成がこれまでなされていなかったからである。なるほどシラバスでは、外部外国語能力試験4級が科目の共通達成目標として掲げられてはいるが、それはあくまで目安としての設定に過ぎなかった。

改善策として考えられる方向性には2通りあるだろう。第一は、目安としての外部外国語能力試験の実質化、すなわち受験義務化である。第二は、学生が習得すべき最低限の必須項目(エッセンシャル・ミニマム)を島根大学独自に策定することである。初修外国語の外部試験は、例えば英語のTOEICのように細かく点数化されるものではないこと、また、初修外国語教育には言語運用能力養成のみではない理念、目標があることを理由に、われわれは後者を選択した。CFLEの教員スタッフ(常勤、特別嘱託講師)は平成18年4、5月の2ヶ月をかけ、島根大学の初修外国語エッセンシャル・ミニマムについて、集中的に議論を重ね、その共通枠組みに関して合意するにいたったのである。

島根大学初修外国語エッセンシャル・ミニマムに関する合意事項

エッセンシャル・ミニマムについての議論の過程でわれわれは、理想と現実とのギャップにいやでも直面せざるを得なかった。教える側の理想とするとところ、大学教育全体の中での初修外国語教育

の位置付け、および学生の現実との間には、あまりにも大きな隔たりが存在する。

現行単位制度下での外国語教育の位置づけは、実技科目にほぼ等しいものであり(註5参照)、授業外での学習時間は講義科目の1/4しかない。また、学生の適性、興味もさまざまであり、全員が優の成績を修めるわけでもない。エッセンシャル・ミニマムを到達目標に対応させれば、それは教員の大きな足かせとなる。また、学生の現状を追認しただけのエッセンシャル・ミニマムとすれば、それではあまりにも内容の乏しいものになってしまう。理想と現実のこのような狭間で、われわれがたどり着いた解決策は、到達目標は優の学生に対応し、エッセンシャル・ミニマムは可の学生が最低限習得すべき事項とすることであった。もちろんこれは、学生の現状を追認した結果ではなく、現行単位制度下の学習時間で、単位修得のためには最低限これだけは習得しなければならないという教員側からのメッセージであり、いわゆる「楽勝科目」を初修外国語から追放することを意味している。

さらに、今後の具体的作業としては、到達目標に対応する資料集、ないしはエッセンシャル・ミニマムに対応する〇〇語I教科書を、今年度中に各外国語で作成し、来年度以降はそれらを踏まえた授業を実施することとなった。

紙数の関係で、個々の事項にたいする解説は割愛せざるを得ないが、以下にわれわれの合意事項の全文を紹介する。

- ・ エッセンシャル・ミニマムに島根大学初修外国語共通の枠組みを設定する。
- ・ エッセンシャル・ミニマムは島根大学初修外国語教育の理念・目標⁴⁾を踏まえたものである。
- ・ 到達目標とエッセンシャル・ミニマムは同じものではない。到達目標のおおよそ6割をエッセンシャル・ミニマムとする。
- ・ エッセンシャル・ミニマムは現行単位制度の下、学生たちが60時間の授業外学習で無理なく習得可能なものである⁵⁾。
- ・ エッセンシャル・ミニマムを教材編、資料編の2部構成とする。今年度どちらを作成するかは各外国語にまかせるが、最

終的には各外国語とも両方を揃える。別冊としても良いし、合本でも良い。

- ・ エッセンシャル・ミニマム教材編-エッセンシャル・ミニマムを踏まえた「〇〇語I」独自教科書を、各外国語で作成する。エッセンシャル・ミニマムを超える内容を含んでも良いが、何らかの形でそれを明示する。
- ・ エッセンシャル・ミニマム資料編-到達目標に対応する内容の冊子を作成し、そのおおよそ60%の項目をエッセンシャル・ミニマムとする。どの項目がエッセンシャル・ミニマムかを明示する。到達目標を超える内容を含んでも良いが、何らかの形でそれを明示する。名称に関しては、出来上がったものを見た上で、検討する。
- ・ 平成18年度に各外国語のエッセンシャル・ミニマムを策定し、平成19年度以後はそれを踏まえた教育内容を実施する。

エッセンシャル・ミニマム教材編

島根大学のカリキュラムに合わせて、導入+12課構成とする。エッセンシャル・ミニマム資料編と内容をリンクさせる。

エッセンシャル・ミニマム資料編

① 言語内項目

1. 文字と発音
2. 語彙
3. 文法
4. 運用-技能別とはせず、場面別に整理し、その中に4技能を総合的に盛り込む。場面別整理を、具体的場面の整理とするか、機能別の整理とするかについては、初修外国語として統一せず、また両者が混在しても良いものとする。「場面」に関しても、当面共通の枠組みは設定しない。

② 言語外項目

現代社会事情に限定する。サブカテゴリーに関しては、その名称及び数、あるいはサブカテゴリーを立てるかどうかを含め、とりあえずは各外国語に委ね、今後発展的に統一を図る。

エッセンシャル・ミニマム - 大学における初修外国語教育理念の再構築のために

CFLE設置に向けての提言書の中でわれわれは、「大学教育のエッセンシャル・ミニマムとしての初修外国語教育」を理念の一つに掲げた。個々の授業科目や教育課程のエッセンシャル・ミニマム策定以前に、高等教育機関としての大学教育全体にかかわるエッセンシャル・ミニマムがなければならず、初修外国語教育は当然その中に含まれるとの主張である。複数の外国語学習は、大学入学以前教育の世界基準であると考えられるが、日本でこの基準を満たしている高等学校が殆んどない現状を踏まえれば、初修外国語教育は大学が社会に対して果たすべき教育責任の一端を担っているのである。

法人化以降の国内の競争的環境下や、さらにはグローバル化の大波の中で、世界基準を満たさない地方の小規模大学が生き残るのは容易なことではない。それらの大学は教育に重点をおく大学として、各々生き残りを模索するしか選択肢はないが、その渦中で、教育の「効率化」の名のもとに「役に立たない」初修外国語を必修から除外しようとする傾向が、今後ますます強まることが懸念される。しかし、それは上記の主張からすれば教育責任の一部放棄であり、大学の生き残り戦略としては、大きな間違いであると言わざるを得ない。学生のほぼ全員がゼロからスタートする初修外国語教育こそが、その大学の教育力を計る指標であり、またそうでなければならない。そのためにわれわれは教育改革の先頭に立ち、新しい大学教育のモデルとなりうる教育を提供しなければならない。

大学教育のエッセンシャル・ミニマムのエッセンシャル・ミニマム、そこから初修外国語教育の新たな挑戦が始まるのである。

註)

- 1) 英語以外の外国語を意味する島根大学における用語。初習外国語と呼んでいる大学もあるようだが、授業を履修し、単位を修得しても、その外国語を習得したことには必ずしもならないところに、日本の大学における初修外国語教育の問題の核心があると筆者は考えている。
- 2) CFLEがこれまで実施した学生アンケートの集計結果、自由記述は、CFLEのホームページ上で公開されている。
<http://cfle.shimane-u.ac.jp/center/fd/questionnaire/shoshu.html>
- 3) 教員別の集計も行ったが、直接関連しないので、本稿では言及しない。教員別集計から、授業担当のみの嘱託講師(非常勤講師)を組織的教育に組み入れることには無理があり、それでは教育の責任体制の確立は困難であることが明らかになった。このことを受け、島根大学初修外国語では、平成19年度以降は、常勤教員、および一定の授業外の教育業務にも従事する特別嘱託講師のみからなる教員スタッフ構成をとることとした。
- 4) 島根大学初修外国語教育の到達目標と「〇〇語Ⅰ」共通シラバス「授業の目的」欄を参考までに記しておく。

島根大学初修外国語教育の到達目標：各初修外国語において、4技能バランスの取れた基礎的運用能力を習得し、同時に、異文化理解及び多元的文化の理解を深めることを目標とする。運用能力の具体的到達目標としては、各初修外国語能力検定試験4級を想定する。

「〇〇語Ⅰ」共通シラバス「授業の目的」：読む・聴く・話す・書くという4技能のバランスのとれた〇〇語の運用能力の基礎を身につけることが目的である。また、英語以外の外国語を学ぶことで、多元的文化の理解を目指す。

- 5) 現行単位制度での1単位は45時間の学習を前提としている。4単位の総学習時間 $45 \times 4 = 180$ から総授業時間(1コマ90分の授業を2時間と計算する) $30 \times 4 = 120$ を引けば60時間が授業外の学習時間となる。

Hiroshi Nishiwaki was born and studied in Kyoto, and has been teaching German at Shimane University since 1981. He is now a professor of the Center for Foreign Language Education, Shimane University. He is currently interested in educational management of teaching foreign languages other than English at Japanese universities.

